

本通信は、一般財団法人地域活性化センターが主催する地方創生実践塾in海士町の運営グループと法政大学現代福祉学部保井ゼミナールの協働によって作成・発行されるニュースターです。

## 海士町(あまちょう)の産業

海士町通信第一回目は海士町の産業を取り上げます。その前に、海士町とはどのような場所なのかを説明します。

海士町は島根県隠岐諸島の中の一つである中ノ島のこと、一島一町です。コンビニも、スーパーもない、信号機もたった一つというとても小さな島ですが、そこには昔からの地域住民の知恵と新たな移住者の視点が融合し、地域創生の分野で今とても注目されている島です。

海士町は、地域資源を活用した産業が盛んで、多くの魅力が詰まっています。特産品を活かして雇用を創出し、開発を行った結果「さざえカレー」や「岩がき春香」を生みだし、島の環境で飼育したブランド牛「隠岐牛」などが有名です。このような背景には、島外から商品開発研究生を招き、共同で開発したり、島で一貫して繁殖から肥育までを行うなど、島のブランド化を意識した産業を行ってきたことが挙げられます。

また、離島の流通ハンディを解決するため鮮度を保つ凍結システムを開発し、出荷時期を調整できるようになりました。海士町では商品開発から販売までを島全体で行うことで、他の地域にはないような独自の産業が構築されていると言えます。本号では、そうした取り組みがどのように実現したのかを聞いていきたいと思います。



## 濱中香理さん特別インタビュー第1弾 「サクセスよりチャレンジを」

Q1. 移住者とともに様々な新事業を進められてきましたが、地域住民の賛同はどのようにして得てきたのですか？

A. 海士町ではU・ターン連携や島外の方たちとの交流を通じて、「岩がき春香」や「高校魅力化」など、多くの地域づくり事業に挑戦してきました。こうした挑戦を始めるときには必ず反発が起こります。住民の中には、地域のこれまで大切にしてきた歴史や習慣が消えてしまうのではないかと心配する人もいます。他方、そうした多様な挑戦や交流は、これまで当たり前だと思っていた日常の中に価値があることに気づかせてくれたり、海士町にしかない魅力を再認識させてくれます。もちろん失敗もありますが、ひとつの事業を長い時間をかけて継続的に行うことで、徐々に地域住民の見方や意識も変化していきます。地元の人と移住者との関係性もうまく構築され、互いに信頼を獲得することができてきたと感じています。

Q2. 様々な地域づくりにおける取り組みを行ってこられました、今後はどのような姿を目指していますか？

A. 確かに海士町は様々なことを行ってきましたが、私は、どれも成功事例ではなく、挑戦事例であると思っています。今後は次世代の若者たちがこの島で挑戦してみたいと思える環境をつくっていききたいですね。

Q3. 新型コロナの感染拡大を受けて何か意識が変わったことはありますか？

A. 自給自足できる、どんな時も「三密」になることはない、いつも同じ人と会うので不安もない、そして今も(zoom越しに)聞こえるように鳥の声を聴きながら仕事できる。こんなことが恵まれていると思うようになりましたね。やはり暮らしの豊かさは、ここに 있습니다。

## 地方創生実践塾in海士町 主任講師 濱中香理さんとは？

海士町人づくり特命担当課長の濱中さん。長年、水産業務を担当され、CASと呼ばれる鮮度を保持する冷凍技術を活用した事業立ち上げに従事されました。第三セクター(株)ふるさと海士の社員や地元の漁業者などと共に、商品開発や販路開拓などを手がけられたのち、現在は島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクト及び地方創生戦略プロジェクトを担当されています。



## 本号担当学生による編集後記

芸術、文化の成功者は異端児と言われ、周囲に理解されるまで時間がかかる人もいる。新しいことを始めるには多くの反対や反発があり、それに負けない情熱や努力が必要だと思う。

今回、とても印象的だったのは成功事例ではなく、挑戦事例という言葉だった。周囲から見れば、実績を残しているにもかかわらず、常に次が最高という考えで仕事をしていく。そのために工夫をし、知恵を絞りながら周りの人を巻き込むことはいつの時代も大事であると感じた。

法政大学現代福祉学部  
福祉コミュニティ学科保井ゼミ2年  
飯塚百音



←今回はリモートでインタビューさせていただきました。ゼミの先輩で海士町出身の真野拓哉さんの司会です。